

修煉で現れた奇跡

* 子ども弟子篇 *

明慧出版社

明慧出版社および明慧ネットが全ての著作権を所有します。
事前の許諾なく無断で、本書を複写複製、転載、送信することを禁じます。
(電子、機械、写真、録音などの手段を含む)

Compilation and Introduction copyright © 2021 by Minghui Publishing Center Corp.

Copyright © 1999-2021 by Minghui.org

前書き

法輪大法を修煉している子ども弟子が多くいます。彼らは、『封神演義』に登場する哪吒（ナタ）のように風火輪に乗ることもなければ、『西遊記』の孫悟空のように虎皮の腰巻きもしていないし、見た目からして普通の子どもと何ら変わりはありません。しかし、彼らは総じて親を驚かせるような「大人らしい」発言や不思議な出来事を口にすることがあることから、「小さな神仙」と呼ばれることもあります。

現代教育の下で、「子どもに何が分かるのか」と考える大人は少なくありません。しかし実際、いくつかの側面に限ってみれば、子どもは必ずしも大人より劣っているとは言えません。多くの幼い子どもたちは生まれながらにして聡明で、物事をよく理解しています。

では、16人の子ども弟子の修煉の物語を一緒に見てみましょう。

目次

1. 病弱だった小龍ちゃん（中国広州市）	5
2. 星たちが走っている（中国遼寧省）	7
3. 浮き上がった（フランス）	9
4. 心性を向上させていく沁沁くん（中国四川省）	10
5. 三人きょうだいの修煉の物語（オーストラリア）	14
6. 起きなかった交通事故（中国北京市）	18
7. CとDからAに（アメリカ）	21
8. トラブルメーカーの学生が真実を知った（中国）	22
9. 宇宙の中を旅する（中国）	24
10. 揚揚くんの修煉の物語（中国）	26
11. 良い功法は永遠に人々の心に根付く（中国）	29
12. 心自ずから明らかな子ども弟子（カナダ）	31
13. 奇妙な世界（中国）	33
14. 詩「遊」（中国）	35
15. 師父が天目を開かせて下さった（中国）	36
16. 真に大法を修煉すれば、必ず家に帰れる（中国）	40

1. 病弱だった小龍ちゃん

私は小龍（シャオロン）と言います。5歳になったばかりで、広州市の幼稚園に通っています。私は生まれた時から体が弱く病気がちで、パパとママを心配させていました。私の病気を治すために、パパとママはたくさんのお金と多くの時間を使いました。手が回らないため、私の世話をする人も2人雇われました。それでも足りず、2人のおばあちゃんが手伝いにくることもよくありました。私はその時「小猿のように細く痩せている」と言われていて、悲しかったです。

3歳になったある日、私はママがずっと涙をふいているのを見て、なぜか分かりませんでした。後日、母が治るかどうか分からないとても深刻な肝臓の病気になって、私のことが気がかりで泣いていたと、パパから話を聞きました。

その後、ある親切なおばあさんがママに「法輪大法というとても良い気功があるよ」と教えてくれました。お婆さんは、法輪功を修煉すれば、自分が健康になるだけでなく、家族全員が恩恵を受けることになると言いました。こうして、ママは法輪功を習い始めました。ママは毎朝煉功し、夜は師父の本を読んでいた。その後、私もママから煉功を習い始め、それ以来、私は病気に罹ることはありませんでした。そして初めて、病気がないことはどんなに嬉しいことかを知りました。

以前の私はアイスクリームもチョコレートも食べることができず、フルーツもりんごしか食べられず、食べると喉が痛くなり、風邪をひいて熱が出たりしていました。今では、大きなアイスクリームやスイカ、そしてチョコレートも好きなだけ食べることができます。以前、寒い日はたくさん服を着なくてはならず、暑い日はちょっとした厚着でもだめで、風や日差しにも弱かったのですが、今は何も気にしなくても大丈夫です。ママはよく、師父の写真の前に立って「師父に感謝しましょう」と言います。私は師父にとっても感謝しています。

また、ママは師父の本の読み方も教えてくれました。まだ5歳の私ですが、師父の『洪吟』にあるすべての詩、『精進要旨』の10編以上の経文を暗唱できます。そして、『轉法輪』の「論語」や本にある多くの物語も暗唱できます。多くのおじさんやお婆さんは、私が暗唱できることに驚き、とても賢いと言ってくれました。ママはおじさん達に、大法が私の知恵を開いたのだと言いました。

私が元気になったのを見て、皆は「不思議だ！」と言っていました。ママも健康になっただけでなく、性格も良くなり、すべてが良くなりました。こうして、おばあちゃんも、パパも法輪功を修煉し始め、叔父、叔母、お姉ちゃんも修煉するようになりました。

おばあちゃんとお姉ちゃんは天目で法輪を見たことがあり、パパも人には見えなかったものが見えました。おばあちゃんは「煉功してから、何十年も苦しんでいた病気

が全部なくなった」と言いました。パパは「煉功してから、体の調子が良くなり、元気になり、気分まで爽やかになった」と言っていました。

ママからは「師父の本に書かれているのは、良い人になるための道理なんだよ。良い人になってはじめて功が伸び、宇宙の『真・善・忍』の特性に同化できるのよ」と言われています。ママはまた、「師父はとても慈悲深い人で、多くの人の病気を取り除き、私たちに多くのものを与えて下さったのに、弟子たちには一円も求めているのよ。師父が私たちに望んでいるのは善に向かう心、良い人であることだけなのよ」と言いました。私は師父のお話を聞き、良い人になりたいです。

この間、パパとママが暗い気持ちになっていると感じました。「今は、私たちの煉功を禁ずる人もいるのよ」とママは言って、煉功しなければ私が再び病気になるのではないかと心配していました。「私は必ず煉功する」と私が言うと、ママは「そうだね。私たちが煉功をやめることはない。大法は命よりも貴重なんだから」と言いました。

おじいちゃんによると、人々は私たちが迷信的なことをしていると言っているそうです。ママはこう言いました。「私たちはみな病気が治ったので、迷信ではない。他人には見えないものが見えるのは迷信ではない。それに、良い人になるように教えることも迷信ではない」

法輪大法を学んだ今、私はすべての子どもたちに法輪大法を学んでほしいと思っています。そうすれば、皆が元気でいられて、パパやママに健康のことで心配してもらう必要がなくなり、注射や薬、入院などの心配事もなくなります。

このお話は1999年6月に小龍ちゃんを書いた文章です。20年以上が経った今、小龍ちゃんもすっかり大人になりました。

2. 星たちが走っている

この物語の主人公は阿龍（アーロン）くんと言います。当時7歳だった阿龍くんは、遼寧省錦州市に住んでいました。ある日、彼は母の勤め先で『法輪功（改訂版）』という本を目にしました。表紙を見たたん、そこにある星たちが走っているのが見えた彼は、その本を借りて家で読み聞かせしてほしいと母に頼みました。聞いていくうちに、彼は今度は、煉功場（気功教室）に行って煉功したいと言い出しました。阿龍くんは何度も言われて、あまり気の進まなかった母親は仕方なく、彼を煉功場に連れて行きました。

動功を習う初日に、阿龍くんは皆と一緒にすべての動作をやり遂げました。彼が真剣に学んでいるのを見て、皆は彼に静功も教えました。毎日の放課後、阿龍くんが帰宅して真っ先に行くことは、李先生の説法の録音を聞くことでした。

ある時、咳をしている彼にお父さんが薬を飲ませようとしたとき、阿龍くんは「僕は常人ではないから、薬を飲まなくても咳は治るよ」と言いました。おばあちゃんに「病気があるのに、どうして薬を飲まないの？」と言われて、彼は「これは病気ではないよ。業力を減しているんだよ」と言いました。「業力を減するとはどういうことなの？」とおばあちゃんに聞かれて、阿龍くんは「分からないのも無理はないよ。おばあちゃんは修煉していないから」と言いました。

学校でも、阿龍くんは「真・善・忍」の教えを守るようにしていました。ある日、学生たちが列に並んでいたとき、誰かが一生懸命に押していました。先生はある生徒を引きずり出しましたが、その生徒は、自分を押したのは阿龍だと言いました。そこで、先生は阿龍くんも引きずり出しました。阿龍くんは悔しいと思いつつ、言い返さずに黙って耐えました。家に帰ってから、阿龍くんは母親にこう言いました。「僕は先生やあの生徒に言い返したりしないよ。僕は煉功者だから、我慢すべきだね」

阿龍くんは自分自身が煉功を頑張るだけでなく、母親にも一生懸命に煉功するように励ましました。ある日、座禅を終えた母親が足を崩しながら「痛かった」と言うと、阿龍くんは真剣な表情で「実は、僕も足が痛かったよ」と言いました。また、彼は母親に、座禅中に足が痛くなったとき、心の中で「忍」を唱えていたと話しました。小雨が降っていたある日、母親が煉功に行くのをやめようと言い出すと、彼は「雨って何？ 功って何？ 煉功者は少しの雨粒も恐れないよ」と母親に諭しながら言いました。

子どもでありながら大人のような修煉者を前にして、母親は密かに喜びの笑顔を浮かべながらも素直に注意を受け入れ、師父の本に書かれている通りに自分の執着心を取り除きました。

ある夜、煉功場の同修の皆で『轉法輪』を読んでいる途中、眠ってしまった阿龍くんは目を覚ますとすぐに、「どうして床一面に花が散らばっているの?!」と叫びました。こうして大人たちは、阿龍くん为天目が開いていることが分かりました。もうお分かりだと思いますが、前述の阿龍くんが見えていた星たちは、実は『轉法輪』の表紙にある大小の法輪の図形だったのです。阿龍くんは天目が開いているので、法輪が動き回っているのが見えていたのです。

阿龍くんは幼いものの、功能を追求すべきではないという道理が分かっていました。その後、誰かに「阿龍ちゃん、地面に花があるかないか見てごらん」と聞かれると、彼は真顔でこう答えました。「見えてるけど、求めないよ。求めることは執着心だからね」

1999年に7歳だった阿龍くんはもう大人になりました。師父が『二〇一四年サンフランシスコ法会での説法』で言われた言葉、「修煉は初志貫徹することができれば、必ず成功します!」を覚えておきましょう。

3. 浮き上がった

私は西玲（シーリン）と言います。フランスに住んでいる法輪功の子ども学習者です。修煉を始める前、私は幼いときから薬を飲んでいました。法輪功の修煉を始めてから、私はますます元気になり、今では病気知らずで元気いっぱいです。

他にも、私は多くの超常的なことを経験しました。

2回ほど、授業中にトラブルメーカーの子が外からスプレーガンで催涙ガスを教室に吹きかけていたのを覚えています。クラス全員がくしゃみをしたり、喉を詰まらせたり、涙を流したりしていましたが、私だけが何ともありませんでした。先生は驚きのあまり、「あなたは どうして大丈夫なの？！」と聞いてきました。私は先生に「法輪功を修煉しているからです」と答えました。このようなことは何度も起きていました。

2000年1月5日の午前2時過ぎ、さらに不思議なことが起きました。夢から目が覚めた私は、自分が座っていることに気づきました。上半身を後ろに倒そうとしたところ、身体が引っかかったように動かなくなり、背中には何の支えもありませんでした。そのとき、耳元で聞こえる「ヒューヒュー」という音と共に、私の体が浮き上がりました。何かが私を下から支えているのだろ うと思いましたが、そこには何ともありませんでした。そこで、私は煉功者であれば空中に舞い上がることがあることを思い出して、心の中で「恐れる必要はない。恐れなくてもいい」と思いました。

体がしばらく空中で止まっていて、とても心地よい感覚でした。「けっこう時間が経ったな」と思ったとたん、一瞬にして私はベッドの布団に戻りました。私は本当に法輪大法の不思議な力を実感しました。

4. 心性を向上させていく沁沁くん

四川省の成都市に沁沁（シンシン）くんという子どもがいて、当時はまだ6歳で、幼稚園児でした。新年が近づき、幼稚園は休みになり、両親も仕事に行かなければならないため、沁沁くんはおばあちゃんの家で預けられました。

その頃、沁沁くんの60歳のおばあちゃんは法輪功の気功教室でボランティアの世話人をしていて、家ではよく李洪志先生の説法録音を聞いていたので、沁沁くんもだんだんと李先生の説法を聞きたくなりました。

おばあちゃんが説法を聞こうとする度に、沁沁くんも手元の遊びをやめて、一緒に静かに録音を聞くことにしていました。しかも聞いた後、彼はよくおばあちゃんに法輪大法の学習者たちの修煉の話をしてほしいとお願いしました。時間が経つにつれて、法輪大法は沁沁くんの心に根づき、花を咲かせ、しかも実も結びました。

ある日、迎えに来た両親を見るとすぐ、沁沁くんはこう言いました。「パパ、ママ、おばあちゃんが習っている法輪大法はとても良いものだよ。李先生が教えている真、善、忍もとても良いものだから、ぼくも習いたい!」。母親は好奇心から「沁沁、真、善、忍って何?」と聞きました。「真は、本当のことを話して、真実のことをすることだよ。善は慈悲心があって、善良で優しい心を持つことで、忍は殴られても殴り返さず、罵られてもやり返さず、がまんすることだよ」と、沁沁くんは息もつかずに言い終えました。

沁沁くんが授業中に先生の質問に答える時よりもすらすら話していたのを見て、お母さんは喜んでいました。

沁沁くんは口先だけではなく、実際にその通り行動していました。新学期が始まったある日、あるいたずらっ子がわざと沁沁くんの顔を引っかいてしまいました。顔から血が出て、涙が出るほどの痛みを感じつつ、殴り返したい気持ちがいっぱいになっていた中で、沁沁くんはふと李先生が『轉法輪』で言われたことを思い出しました。「一人の煉功者としては、まず殴られても殴り返さず、罵られてもやり返さないで、ひたすら耐えられるようであればなりません」。そこで彼は、煉功者として、李先生の言うことを聞くべきだと思いました。そう思ったとたん、痛みが消え、涙も止まりました。彼はやり返さなかっただけでなく、怒りの言葉すら口にしませんでした。

それを見たクラスの先生は、よくがまんできたねと沁沁くんを褒めました。

それ以来、子どもたちに殴られても、罵られても、物を盗まれても、沁沁くんは我慢しようと思い、本当に殴られても殴り返さず、罵られてもやり返さないようにしていました。クラスの子どもたちは皆、沁沁くんが好きになりました。

沁沁くんは常に李先生の言うことに従うように努力していて、心性もとても速く向上しました。

ある日、雨の後で道がすべりやすく、彼を連れて同修の家に行こうとしたおばあちゃんは、彼をおんぶして行くことにしました。通りには多くの歩行者がいて、自転車に乗っていたあるおじいさんがうっかりと沁沁くんの足にぶつかりました。ぶつけられて痛かったにもかかわらず、沁沁くんは笑顔で「ごめんなさい。僕の足で汚してしまって！」と、おじいさんに言いました。

自転車に乗っていたおじいさんは嬉しそうに、「いい子だ。しかし、先にぶつけたのは私だ」と言いました。

2日後、おばあちゃんは沁沁くんを連れて市場へ買い物に行きました。荷車を持ったおばあさんが、かごの中の茄子を一本落としてしまったのを見た沁沁くんは、それを拾って、「おばあさん、茄子を落としましたよ！」と声を掛けました。おばあさんは沁沁くんが茄子を取ったと思い、怒ったようすで茄子を奪い取っていきましました。一瞬ぼかんとした沁沁くんは、すぐに自分が煉功者であることを思い出し、おばあちゃんにこう言いました。「おばあちゃん、さっきのおばあさんは、僕の心性を試すために李先生が安排してくれたんだね」

確信を持ってそう言った沁沁くんを見て、おばあちゃんは「どうして分かるの？」と聞きました。沁沁くんは「茄子を拾ってあげたのに嫌われるなんて、きっと李先生は僕ががまんできるかどうかを試されたんだよ」と言いました。

まもなく、心性の試練が再びやってきました。ある朝、郊外に住む沁沁くんは父親に連れられて、市内のおばあちゃんの家に向かっていました。途中、父親の自転車の後ろに座っていた沁沁くんは、遠くからやって来る女性が見えました。女性は、ブドウの入った二つの大きなカゴを自転車の後ろに乗せて、市内に売りに急いでいました。女性が沁沁くんの近くにきたとき、ブドウの入ったカゴが沁沁くんに引っ掛かかり、彼は自転車から落ちてしまい、大きなカゴが沁沁くんの足の上でひっくり返ってしまいました。

女性は何と言ったらいいか分からなくなり、びっくりして震えていました。そこへ多くの人が集まってきました。父親は慌てて沁沁くんを抱き上げて、母親も心配そうにしていました。

沁沁くんは震え上がっている女性に、「おばちゃん、もう行ってもいいよ、何でもないよ」と、落ち着いた口調で言いました。女性はとても感動し、「お利口さんだね！ 本当にごめんね。このブドウをどうぞ食べて」と言いました。沁沁くんは「いいえ、いいえ、家にもあるから」と言いました。

見物していた人たちも感動して、「この子は本当に物わかりがいいね」と言う人もいました。

父親は安心できず、沁沁くんの足をじっくり見てみましたが、本当に傷がなく、かすり傷さえなかったのを見て、とても不思議な気持ちになりました。

家に着くと、沁沁くんはおばあちゃんに「おばあちゃん、あのブドウ売りのおばさんは本当に可哀想だよ。こんなに朝早くから市内に来なければならないんだから」と言いました。

沁沁くんのおばあちゃんは、1995年に法輪大法を修煉し始めました。沁沁くんもその頃から、法輪大法の子ども弟子になりました。誰かに要求されたわけでもないのに、幼い彼は自分を煉功者として気をつけていました。おばあちゃんが学法するとき、彼はいつも静かにそばについていました。彼は李先生の説法録音や説法のビデオを何度も聞き、何度も見ていました。その中のいくつかの言葉は彼の心に深く刻み込まれていて、法輪大法は沁沁くんにとってますます重要なものとなりました。

ある同修が、水道の蛇口の使用問題をめぐって隣人と言い合いになりました。それを知った沁沁くんはその同修にこう言いました。「私たち煉功者は心を修め、徳を守るべきで、魔の妨害を受けないように注意しなければなりません。これは李先生があなたの心性を試されていると思います。耐えることができれば、心性を保つことができたということになりますよ。耐えなければなりません」。その同修は恥ずかしく思い、「本当だ。私は沁沁くんよりも分かっていなかったね」と言いました。

また、沁沁くんはすべての物事を「真・善・忍」という法理に照らし合わせて見るようにし、自らの心性を向上させるだけでなく、両親の心性の向上も助けていました。ある日、両親がケンカをしていてどちらも一步も引かず、家の空気が急に緊張し始めました。沁沁くんは台所に行き、父親にこう言いました。「パパ、『真・善・忍』を実行すべきではないの？ 2人がケンカすれば、人に笑われるよ」。父親は恥ずかしく思い、母親のところに行って、「ママ、パパは我慢するから、あなたも我慢してみたら？」と言いました。母親も恥ずかしくて何も言えませんでした。短時間で両親は仲直りしました。

時間が経つにつれ、沁沁くんはますます自分を厳しく律するようになりました。

半年後のある日、沁沁くんはおばあちゃんに「李先生が言われている『真・善・忍』は、常人社会で苦しみに耐えるようにという意味だと思う。今日から、おいしいとか、おいしくないとか言わないよ。すべては自然に任せて、お腹が空いたら空腹を満たせばいいんだよね」と言いました。その後、おばあちゃんに「沁沁、今日

は何を食べようか？」と聞かれる度に、彼はいつも「何でもいいよ」と答えていました。

求めることが少なくなっただけでなく、沁沁くんは勉強もがんばるようになり、働き者にもなりました。自分の部屋の片付けに加えて、彼はゴミを捨てに行き、ランドセルや文房具、おもちゃの整理も自ら行うようになりました。法輪大法の修煉を始める前の彼は、これらのことをしたことがありませんでした。

そんな沁沁くんの大きな変化を目にして、両親はもっと彼を可愛がるようになりました。沁沁くんは確かに別人のように変わっていきました。家の中だけでなく、両親やおばあちゃんに連れられて人の家に遊びに行くときも、しっかりとした振る舞いができていました。誰の家に行っても、ゴミが落ちていたら拾ったり、彼にできることなら何でも率先してやっていました。また、自分の家に誰かが遊びに来ると、「果物を食べて、お茶を飲んで」と温かく声をかけたりしました。皆が「いい子だね」と沁沁くんを褒めてくれました。

ある日、沁沁くんはまじめな顔でおばあちゃんにこう言いました。「おばあちゃん、僕たち2人は必ず正果を得なければいけないよ。李先生の言うことを聞いて、一生懸命に煉功しなければいけない。気楽にやっていたら成就できないよ」。その後、沁沁くんはもっと積極的に煉功するようになりました。

おばあちゃんと一緒に煉功する以外に、沁沁くんは自分で煉功するときもありました。特に、真夏の午後3時か4時になるととても暑く、太陽に面したベランダが日差しでさらに暑くなっているにもかかわらず、沁沁くんはベランダに行って座禅をしました。両足を組んで座り、時には10分、時には30分の座禅を行う彼は、大量の汗をかきながらも、表情から見れば真剣そのものでした。そのような沁沁くんを眺めながら、おばあちゃんはとても感動し、「この子は心に佛がいるので、きっと成就できる」と思ったそうです。

5. 三人きょうだいの修煉の物語

私の名前はキャシーで、8歳半です。私の名前はチェリーで、6歳半です。僕はケビンで、4歳半です。

今日、私は妹と弟を代表して、私たちの修煉体験を皆さんに紹介したいと思います。私たちはまだ小さいですが、すでに1年以上も修煉してきた古い学習者です。

私たちが初めて法輪大法に出会ったのは、母が持っている法輪大法のバッジを見たときでした。それが気に入った私と妹は、それぞれ一つずつバッジをもらい、ランドセルに入れました。

学校から帰ってくると、妹が母に「ランドセルの中が光っていて、輝いていたよ」と言うと、母はそれが法輪大法のバッジの光だと言いました。電気も電球もないのに、法輪のバッジが輝いていたので、そこから私たちは法輪に興味を持ち始めました。

その後、母が煉功しているのを見て、面白そうだったので真似をしました。

ある日、妹は「ママ、しっかり煉功すれば頭の上に花が咲くよ」と言いました。「誰からそんなことを聞いたの？」と母に聞かれて、妹は「とにかく知ってるの、本当よ。しかも三つも花があるの」と答えました。その後、母は30分の5式の功法の煉功音楽をテープに録音してきて、私たちを連れて一緒に煉功し始めました。それ以来、学校から帰ってくると、私たちは真っ先に煉功することにしました。

母はまた、李先生の本から学んだ「真・善・忍」についての多くの道理も話してくれました。

初めて李先生の功法を教えるビデオを見たとき、私はなぜか涙が止まらず、ビデオを見た後、すぐに座禅を始めました。弟が横で走っていましたが、私は少しの影響も受けずに30分近く座っていました。

それからの私たちの生活には、二つのことが加わりました。一つは煉功で、もう一つは母から法輪大法の話を聞くことでした。母は、何事においても「真・善・忍」に照らし合わせて行動するようにと教えてくれました。

ある日、車をどこかにぶつけてしまった父が汚い言葉を口にしたとき、弟は父に「善を守るべきだよ」と言いました。

母が持っている本の表紙には、炎に囲まれた法輪が描かれていて、それを見た弟は「ママ、僕にも見えるよ」と言いました。父は最初、修煉を全く信じていませんでしたが、私たちの身に起きたことを見たり聞いたりしているうちに、少しずつ信じるようになり、「子どもは真実を話すものだ」と言いました。

母はずっと、私たちが自分の力でいろんな事ができるように、育ててくれました。ある日、やんちゃな弟がお風呂に入ろうとせず、母に手伝ってほしいとねだっていたところ、母は彼にこう言いました。「自分のことは自分でやりなさい。そうしないと、ママが家にいないときはどうするの？」

その時、弟はいきなり「知っているよ。ママはこれから李先生に会いに行くんだから」と言い、妹と私は冗談だと思って笑いました。数日後、母は法輪大法の修煉体験交流会に参加するためにシンガポールへ行き、そこで李先生に会ったのです。「なんで私たちに言わないで、弟に教えたの？」と母に聞くと、母は「誰にも言っていないよ。弟には機能があって、先に知ることができたみたいね」と言いました。

初めのころ、父は私たちが煉功することに反対していました。ある日、私たちが公園で煉功していた時、父は突然音楽を流しているラジカセのスイッチを切りました。弟がすぐに電源を入れ直しましたが、父はまた電源を切りました。こうして2人が何度も同じ動作を繰り返した後、弟は怒りのあまりラジカセを胸に抱きながら、「これはママとお姉ちゃんたちが煉功に使うものだよ」と言い、私たちが煉功を終えるまでラジカセを手放しませんでした。その時、弟はまだ3歳でした。

保育園から帰ってくると、弟は時々、他の子どもに押されたとか、石を使って転ばされたとか、文句を言ったりします。しかし、母から説明を聞いて、善悪には報いがあり、悪いことをすれば業力が生じるという道理が分かりました。弟はまた転んでしまい、母に「どうして転んだの？」と聞かれると、弟は「ごめんなさい。僕が悪いことをしたから、これはバチが当たったんだ。もう二度としないよ」と返事しました。しかし、まもなく、彼はまた悪いことをしてしまいました。母は「弟はまだ幼すぎるからね」と言いました。

去年の11月、ついに父も修煉し始めました。もう煉功を邪魔されることはないと思ひ、皆はとても喜んでいました。

弟は「パパのこと嫌いだったけど、今はパパも煉功を始めたから好きだよ。でもパパは煉功が少なすぎるよ」と言いました。弟の言葉を聞いて、家族は皆笑ってしまいました。去年のクリスマスに父は中国に行きました。父が帰ってきたとき、私たちは一緒に空港に迎えに行きました。父を見るとすぐ、弟は「パパ、中国でも煉功したの？」と聞き、本当に面白かったです。

妹は人を助けることが大好きです。ある時、私は身体に業を滅する状態が現れて、苦しみをがまんしている間、妹は毛布を持ってきてくれたり、水を飲ませてくれたり、食べ物を食べさせてくれたりして、私の大好きなおもちゃも持ってきてくれました。妹はとてもよく面倒をみてくれました。また、妹は先生のように弟の勉強も手伝いました。とてもやんちゃな弟を前にして、妹はいつも根気強くしていま

した。弟が嘘をついたり、人とケンカしたりしたとき、妹は弟に「真・善・忍」を思い出させていました。

ある日、学校で、いたずらっ子が弟のお弁当をゴミ箱に捨てて、さらに弟のお金を取ってアイスクャンディーを買いに行きました。それを知った妹は、やり返そうとした弟に、「放っておこう。彼はあなたに徳を与えているのよ」と言ったそうです。さらに、妹は自分のお弁当とアイスクャンディーを弟と分け合いました。妹はまだあんなに幼いのに、怒らずにがまんすることができ、何よりも常に人のことを気にかけています。弟も私も、そして他の子どもたちも皆、彼女と遊ぶのが大好きです。

母は、妹が真の煉功者だと言っています。妹は口にはしないものの、「真・善・忍」を行動に移しているからです。

次に、私のことをお話ししましょう。

最初のころ、私は毎日帰ってから、30分ほど煉功していましたが、その後は45分間に伸ばし、さらに1時間まで増やしました。

去年のある日、母は「公園に行って大人数の煉功に参加しよう」と言いました。煉功が朝6時40分から始まると聞いて、「早すぎる!」と私は思いました。また、大人たちと一緒に煉功するのは恥ずかしいとも思いました。でも、「そこで煉功すれば、法輪大法を知らない人たちに知ってもらえるチャンスよ」という母の説明を聞いてから、私はアイスフィールド公園での煉功に参加することを決めました。以前の私は、朝8時前には起きられませんでした。でも、煉功に参加するようになってから、目覚まし時計がなくても、母に起こしてもらわなくても、私は6時頃になると目が覚めるようになり、しかも一日中元気いっぱい、眠気も感じたことがなく、煉功が一番からだにいいものなんだと実感しました。

5式の功法の中で、私は座禅が一番好きです。入定の状態に入ると、自分の体が消えたという感じがして、とても心地よいからです。でも、この感覚を求めると、それが消えてしまいます。まさに李先生が言われたように、追い求めれば追い求めるほど、手に入れることはできなくなります。

時々座禅していると、私は自分が空中に浮いていると感じ、大きくて空気がパンパンに詰まって太った人のように感じ、とても面白かったです。

座禅の最初の蓮花手印をしているとき、私は李先生が自分と一緒にしている姿が目に見えました。時々、私は自分が空を飛んでいて、そこには子どもたちが宙返りやブランコをしている様子が見えて、さらに彼らが雲の中で『轉法輪』を学んでいて、本の中の文字から金色の光が放っているのも見えました。

ある日、天上でその子たちに会ったとき、彼らは私に何か食べ物をくれました。それは今まで食べたことのない、とても美味しいものでした。

時には、座禅の途中で足がとても痛くなって、がまんできない時があります。それでも、誰かに無理やり言われたのではなく、私は自分で、音楽が終わるまでがまんすることに決めました。時々、痛みに耐えている私をかわいそうに思い、「やめてもいいよ」と父は言ってくれましたが、私はやめませんでした。それは業力の転化であり、体のよくない物質を取り除かなければ、苦痛に耐えなければ、天国には戻れないことを私は知っているからです。

6. 起きなかった交通事故

私は北京第23中学の二年生で、法輪大法の講習会に参加して、直接李先生の説法を聞いたことがあります。当時はただ好奇心をもって聞いていましたが、それから私は修煉の道を歩み始め、どんなに忙しくても、毎日必ず時間を割いて学法していました。ここでは、私の2年間の修煉過程での出来事を簡単に紹介したいと思います。

(1) 煉功者の基準をもって自らを量る

修煉前の私は、校長先生や先生方に気に入られて、早くも小学2年生の時にクラスの代表に選ばれました。

しかし、法輪大法を修煉してから、トラブルが相次いでやってきて試されました。ある日、誰かに暴言を吐かれましたが、私は言い返しませんでした。なのに、先生は相手を叱るどころか、私が黙認したと責め、私の両親に話をつけに行きました。

別の日に、宿題を手伝うために同じクラスの友達の家に行った私は、帰りにジョークを言いました。それがなぜか先生の耳に入りました。先生は私の冗談を真に受けて、全員の前で私を批判しました。その時、私はこう思いました。「私は法輪功の学習者です。学習者であれば、『真・善・忍』にしたがって自分を律するべきです。どんなトラブルに遭遇しても我慢すべきです。常人である彼らと違って、私は煉功者なので、細かいことにこだわる必要はありません」。それ以降、学校で先生たちにどんな良くない話をされても、私は気にしませんでした。

(2) 名門校に行くチャンスを失った時

修煉前の私は、クラスの代表として、常に身をもって模範を示す事を意識し、高い基準で自分を律していました。勉強の面において、私は真面目に勉強し遅れをとることを嫌がり、常に一番を目指していました。

成績を例に挙げると、99点を取った私は、満点を取った人がいると知った途端に心のバランスを崩していました。私が100点を取った時も、誰かが更にプラス点を取っていると知ると、帰ってから必ず泣き崩れ、次のテストでは1番を取ろうとばかり考えていました。

私はクラスの仕事にも真剣に取り組み、先生から与えられた仕事を必ずよくこなすように頑張り、家に帰るのがどんなに遅くなっても、どんなにお腹が空いても、必ず仕事をきちんと終わらせてから帰るようにしていました。

私の特技は書道で、全国及び北京市で受賞したことがあります。

常識的に考えて、私のような優秀な成績と特技を持つ生徒は、名門校への試験免除がないにしても、推薦を受けてもおかしくありませんでした。しかし、推薦どころか、私は平均以下の中学校に入学させられ、しかも600元も払わされました。それだけでなく、「君は優秀だからこの学校に入れたんだ」と、学校側から告げられました。

両親は学校側に是非をはっきりさせようとしたのですが、私は両親を引き留めました。勉強も仕事もよくできた私は、良い学校に入り、将来は大学に進学して出世しようとも考えていました。しかし、今の私は煉功者なので、超常の理で自分を要求すべきだと考えると、悲しくはありませんでした。私が修煉して得たものは、常人には得られないもので、更に良いものです。名門校に行かせてもらえなかったのは、私がいつも負けん気を起こす執着心を取り除くためだったのかもしれない。

（3）肉への執着をなくす

肉への執着が私の一番大きな問題点であるかもしれません。以前の私は肉がなければならず、毎食主食にしていると言ってもいいほど多くの肉を食べていて、肉がないと食事とは言えないと思っていました。1食目の肉抜きは我慢できても、2食目も肉がなければ必ず泣いていました。そうすると、母はすぐ買いに行ってくれました。法を学び修煉してから、私は肉への執着を捨てなければならないことが分かりました。

師父の説法を聞いて2カ月が経った時、私は急に肉が食べられなくなりました。執着心を取り除いてまもなく、再び肉が食べられるようになりましたが、欲はなくなりました。しかし、食べていくうちに、その執着心がまた現れてきました。

ある日の夕食、お皿に数枚の肉がありました。その肉が良い味だと思った私は、何枚か多めに食べました。最初は何の反応もありませんでした。しかし翌日、私はお腹が痛くなり、下痢をしました。お腹の中に脂身の多い肉が入っていると考え、私は吐き気がして、座禅中もその匂いが込み上げてきて、しまいには熱まで出ました。その時初めて、これは師父が私の肉に対する執着心を取り除いて下さっているのだと思い、肉への執着を更に放下するようにしました。

（4）学法と煉功を通じて業を滅し、外へは求めない

修煉を始めた当初、私は法を多く学んでいませんでした。学校で風疹（ふうしん）が流行したとき、私にも風疹の症状が現れたため、自分も罹ったと思いました。それが病気だとは思っていなかったため、病院にも行っておらず、薬も飲まなかったものの、それが業力を滅しているのだとも考えていませんでした。修煉すれば保険をかけたかのように、師父は私が病気や災難に遭わないように保証してくれるのだと誤解していた私は、家にある大法の本を全部取り出して、本にある師父の写真に向かって、早く治してくれるように師父にお願いしました。

その後、絶えず学法し心性も高まっていくにつれ、私は人間がなぜ病気になるかが分かりました。常人は業力を返しているのに対し、煉功者は業力を消去しているのです。それ以降、似たような状況が再び現れると、私は師父に業力を消去して下さいをお願いするのではなく、自ら積極的に法を学び、より多く煉功を行うようにしました。

ある日、かなりの高熱を出した私は、業力を消去しているのだとすぐに気づき、起き上がって煉功することにしました。「佛展千手法」の3回目が終わらないうちに、服が汗でびしょ濡れてしまい、体温も平熱に戻りました。

(5) 起きなかった交通事故

去年の夏休み、私は母と一緒に親戚を訪ねて承德市に行きました。車は密雲区を通過して、くねくねした山道を登っていくとき、対向車線の大型トラックが中央線をはみ出して、私たちの車に向かってきました。当時、私と母はそれぞれ『法輪功』と『轉法輪』を手にして読んでいました。大きなブレーキ音と共に、ある力によって車が止められました。

車の後部座席に積んでいた荷物が前に飛んでいきました。私の頭は前列の座席の背もたれにぶつかり、足も座席の下にはまってしまいました。車に乗っていた人たちは皆、呆然としていました。

しばらくしてから、誰かが「車がぶつかっていないか調べてみよう！」と言いました。

不思議なことに、今にも車が衝突しそうなところでしたが、車から降りて見みると、車同士は50センチしか離れておらず、交通事故は起きていませんでした！車内で皆は困惑していましたが、私と母だけが分かっていました。李先生の法身による保護がなければ、私たちは無事でいられなかったはずです。車に乗っていた人たちも私たちと一緒に恩恵を受けました。そう考えながら、私たちは再び『轉法輪』を開き、先生の慈悲深い顔を眺めながら、より一層親しみを感じました。

7. CとDからAに

私の名前は桑桑（ソウソウ）です。今年で12歳です。私は1999年5月2日に法輪功を習い始めて、良いことがたくさんありました。

以前の私は1日に4時間もパソコンゲームを楽しんでいましたが、今は全くしていません。つまり、パソコンゲームを完全にやめたのです。当時は、世界中の時間を与えてくれれば、私は肘がカチコチになって、指が動かなくなるまで遊んでいたでしょう。法輪功を修煉する前の私は遊びすぎて、成績はすべてCやDまで落ちてしまいました。

でも、法輪功を修煉してから、成績が回復しました。

さらにその後、私の成績はBが1つだけで、ほかはすべてAになりました。法輪功を学ぶことで、私は集中力が高まり、ピアノも以前より集中して弾けるようになり、宿題もテキパキとこなせるようになりました。ふだん、私はとても謙虚ですが、成績がかなり良くなっていることは認めざるを得ません。法輪功を修煉してから、1998年から1999年にかけて、一学期を除いて、私の成績はすべて満点でした。

私の健康状態も法輪功を修煉することで改善され、あまり良くなかった身体が今はとても良いコンディションになっています。そして、以前の私はよく車酔いや飛行機酔いをしていました。あるとき飛行機に酔って、はいてしまい、シートベルトを汚してしまったため、離陸が1時間も遅れたことがありました。今では私はあまり疲れを感じません。疲れないわけではなく、休息を必要としないわけでもありません。ただ、以前のような常に眠気を感じる状態から抜け出したということです。まるで私の疲れが閉じ込められているかのようです。

もう一つ、健康に関する体験があります。私は、小さいときからずっと便秘でしたが、煉功してすっかり解消されました。でも、不思議なことに、私が悪いことをすると、また便秘になってしまうのです。

8. トラブルメーカーの学生が真実を知った

私は小学校の教師で、クラスの担任を務めています。4年ほど法輪功を修煉しています。

私のクラスには、全校でも有名なトラブルメーカーの学生がいます。彼は農村出身で、3年生の時に転入生として私たちのクラスに入ってきました。彼は何も分からず、授業を聞こうとせず、一字も書けず、問題も一つも解けず、勉強に対して全くやる気がありませんでした。100点満点の進級試験で、彼は数学が6点、国語が11点しか取れませんでした。また、大小を問わず、彼はほぼ毎日問題を起こしていて、授業を担当するすべての教師にとって、最も頭を痛める学生でした。

私もこのことでとても悩んでいて、何度も情に訴えたり、道理で納得させようと頑張ってみました。彼の父親も、家であの手この手で教育してみましたが、効果はありませんでした。

2001年1月23日の大晦日の午後、中国共産党の江沢民集団が法輪功に濡れ衣を着せるために、天安門焼身自殺事件をでっち上げました。事件の発生後、私はずっと「学生たちに真実を伝えよう」と考えていました。しかし、言葉が口元まで来る度に、私はまたそれを飲み込んでしまい、「県城の学校に通う学生たちは状況が複雑で問題も起こりやすい」と心配して、学生たちに伝えられませんでした。

その後、私はこう考えました。「法輪大法はすべての命を大切にしている。慈悲で偉大なる李洪志先生は誰にもチャンスを与えて下さっている。すべての子どもを含めて、誰にも真実を知る権利がある。彼らは嘘や偽りの中で生きていくべきではない」。こうして、私は3月に、学生たちに法輪功について話しました。

その時、私は何の不安もなく、穏やかで落ち着いた口調で話しました。伝え終えた後、一番後ろの席の学生が手を挙げて、「先生、私は法輪功を学びたいです!」と大声で言いました。

見てみると、トラブルメーカーの学生でした。その時、彼はまた騒ぎを起こそうとしているのだと思った私は、「まず座りなさい。後で話しましょう」と言いました。彼が本気で学ぼうとしているはずがないと思い、気に留めませんでした。

瞬く間に4月10日頃になりました。午前中の4限目の道德の授業で、法輪功を攻撃する短文が授業の最後に添付されていました。「こんな悪辣な内容で子どもたちの純粋な心を汚してはいけない」と思った私は、法輪功が人々を善へと導いていること、魔難に直面しても真理を堅持する学習者たちの感動的な物語を紹介しました。

その直後に、トラブルメーカーの学生が再び小さく手を挙げて、「先生、私は法輪功を学びたいです。教えてください!」と言いました。

彼が本気だと気づき、私は彼に教えることにしました。

午後の1限目は、私が担当する数学の授業でした。私が例題の説明を終えるや否や、トラブルメーカーの学生が「解けます」と手を挙げました。彼は集中して授業を聞いたことがなく、問題を解くことは尚更なかったので、当時の私はちょっと信じられませんでした。黒板の前に来させて書かせてみたところ、彼は正解しました。

もう一題解かせてみると、またも正解でした！

クラスの子どもたちも皆、不思議に思いました。

その時、私はこう思いました。「多くは話していなかったのに、この子はすでに法輪大法の善に導く力に突き動かされて、自ら良くなろうとしているのだ！ これはいかなる外部による力でも実現できないことだ」

その日の放課後、彼は職員室に来て、「先生、法輪功を学ぶための本はありますか？」と尋ねました。私は「本はあるけど、あなたには読めないかもしれないね」と言いました。どうしても読んでみたいと言う彼に、私は本を渡しました。いくつかの漢字を除き、彼はなんと最初の部分の「論語」を読み通しました。

その日から、彼はまじめに勉強に取り組むようになり、集中して授業を聞き、宿題もするようになりました。

ある日、国語の先生が思わず私にこう言いました。「あの子は最近どうしたのですか？　ちゃんと勉強するようになりましたね。テストでもたくさん正解して、まるで別人になったようです。話もよく聞いてくれるし、悪いこともなくなりました」

またある日、彼は私にこのように教えてくれました。「ある日、街を歩いていると、壁に『法輪常轉』と書かれていましたが、そのすぐ下に、悪口も書かれているのを見て、私はその悪口を消しました。その後、誰かがまた書き込んだのですが、私はまた消しました」。「本当にいい子だ！」と私は思いました。

大法は縁のある人々を済度します。彼はこうして返本帰真の修煉の道を歩み始めました。私はこのことを彼の両親、及び多くの善良な人々に伝えたいと思っています。

9. 宇宙の中を旅する

この文章の主人公は、11歳の子ども弟子です。彼の名前は毛毛くん、母親と一緒に法輪功を修煉しています。1999年7月に中国共産党が法輪功を迫害し始めた後、毛毛くんは何度も母親と一緒に天安門広場に行き、法輪大法の正義を訴えました。広場で、毛毛くんは落ち着いて警察に直面し、賢くて勇敢で、慈悲と思いやりを兼ね備えていました。

毛毛くんが煉功するとき、彼の元神はときどき体を離れ、師父の後について宇宙の中を旅していました。2001年2月、毛毛くんの元神はまた体から離れて、次のような出来事を身をもって体験しました。

新学期が始まったある日、休み時間に、一人で校舎の最上階に走って行き、静かにそこに座り込んでいた毛毛くんは突然、元神が体から離れていきました。師父の法身に連れられて、彼は天国世界へ行き、そこで楽しく遊んでいました。これは、その年の2度目の元神の離脱でした。普段、師父の法身はよく毛毛くんの周りに現れるのです。彼が何か間違ったことをすると、師父の法身は上級生や他の人の形となって現れ、毛毛くんに注意します。時には毛毛くんの耳を引っ張り、時には夢に出てきて話しかけます。そのため、今回、師父が毛毛くんの元神を遊びに連れて行くことに対しても、彼は全く意外には思いませんでした。

毛毛くんは師父の後を追ってある場所に行きました。そこは、人間の言葉では表現できないほど美しく、人々はみな穏やかで幸せに暮らしています。その時、遠くから、多くの人が集まって地面の何かを見ており、毛毛くんは師父に「彼らは何をしているのですか？」と尋ねました。師父は「行ってみよう」とおっしゃって、毛毛くんを連れて歩いて行かれました。

集まっていた人々の真ん中には穴が開いていて、皆はその中を覗き込んでいました。その穴からは、人間世界で起きているすべてが見えるのです。

師父は毛毛くんに、「この人たちには皆、人間界で修煉している自分の子どもがいて、親として子どもの修煉状態を気にしているのだ」と話されました。

多くの親たちは、自分の子どもがよく修煉しているのを見て喜んでいました。しかし、自分の子どもが中国共産党に脅され、修煉を辞める「保証書」を書かされているのを見て、気を失ってしまった親もいました。

毛毛くんは人混みの中で自分の両親を見つけました。彼らは毛毛くんを見てとても喜び、彼の頭を撫でながら冗談っぽく言いました。「あなたが将来成就すれば、私たちも一緒に福報を得ることになるのよ」

毛毛くんは向こうの自分が1歳か2歳だろうと感じていましたが、すでに数億年も生きているそうです。10代にしか見えない毛毛くんの両親もかなり長い年月を生きてきたそうです。そこにいる人たちはみな若くて美しくて優しくかったです。

その後、毛毛くんは師父について食事に行きました。その食べ物は今まで見たことがないもので、何という名前なのかも分かりませんが、ただ表現できないほど美味しくて、一口食べれば胸に温かさがこみ上げてきて、その後はすべての脈が貫通し、全身に心地よさを感じるのですでした。

その時、毛毛くんは「こんなに美味しいので、持って帰って、お母さんにも食べさせよう」という一念が動きました。

彼にそのような一念がひらめいた途端、師父はお分かりになりました。そこではすべてが透明で、どんな考えもはっきりと見えるからです。師父は首を振っておられ、「やはり人間なのだ」とおっしゃいました。毛毛くんはすぐに、余計な人心である情があることに気づきました。

その後、毛毛くんは他の幾つかの場所にも行き、そこで2～3日ほど遊んでから学校の最上階に戻ってきましたが、ほんの数秒しか経っていなかったようでした。

10. 揚揚くんの修煉の物語

10歳の揚揚（ようよう）くんは、1997年の秋に母親と一緒に法輪大法の修煉を始めました。

修煉を始めた当初、母親は毎朝3時か4時に煉功のために公園に行っていました。揚揚くんも行きたくて、母親に起こしてほしいと頼みました。当時、揚揚くんはまだ6歳でした。北部の秋の早朝はとても寒くて、セーターや毛糸のズボンを着なければならず、時には手袋をはめて座禅しなければ耐えられないため、母親は彼を起こすのはかわいそうだと思います。しかし、揚揚くんは目が覚めて母がすでに煉功から帰ってきたと気づくと、怒って騒ぎ立ててこう言いました。「なんでそんなに自分のことしか考えないの？ 自分の煉功だけが大事で、ぼくにはさせてくれないなんて」。これを聞いた母親はびっくりしました。母親の自分でさえまだはっきりと考えていない事なのに、揚揚くんは問題の本質を捉えていたのです。

その後の修煉の中で、揚揚くんはいつも母にもっと法を学び、もっと煉功を行い、心性を守って初めて功が伸びるんだよ、と言い聞かせていました。しかし、母親は心が優しく、さっぱりとした性格で、よく人助けもしていました。ある日、おばさんの家にいた母親は、おばさんとおじさんが仕事のことで言い合いになっているのを見て、何も言わずに自らその仕事をしに行きました。仕事の途中、母親が何かを取ろうと振り向いた時、ドアの枠におでこをぶつけてしまい、傷ができて、痛みで涙が出ました。

これは心性を守れない修煉者が常人のことに干渉しすぎた結果でした。事後、揚揚くんはこう言いました。「でしゃばったうえに、悟ろうとしなかったからだよ。心性を守らなければ、卍字符が増えるのもとても遅くなるよ」

揚揚くんは母親に、大法を修煉する人は、体の卍字符が増えるのがものすごく早く、十数個から数十個、更に百個と増えていき、身体中に卍字符があると教えました。揚揚くんは、良く修めている大法弟子に比べると、母親はまだまだずっと遅れていると言いました。よく修めている弟子の体にある卍字符は密集していて、小さくて威力が大きいのにに対して、母親の体の卍字符はすき間があいて大きく、威力もそれほど大きくないそうです。

普段、揚揚くんはいつも母親にもっと本を読み、もっと煉功し、心性を厳しく守り、早く次元を向上させていくようにと促しています。

最近、中国では厳しい環境のため、母親は家を追われ路頭に迷うことが多く、煉功にも大きな影響が出て、良い状態ではありませんでした。これを見た揚揚くんはとても心配して、何度も母親に「『玄珠（げんしゅ）を探しに行く象罔（しょうもう）』になってはならず、大法を修煉するには、『愚公（ぐこう）山を移す』ということわ

ざのように、どんなに困難なことでも努力を続ければ、いつか必ず成しとげることができるという精神を持たなければなりません」と気づかせました。

母親は「玄珠を探しに行く象罔」の意味が分かりませんでした。

揚揚くんは、これは師父から聞いたお話だと言いました。ある古代の皇帝が貴重な玄珠（黒い玉）をなくしたため、象罔に探すように命じました。ようやく見つけた象罔は、その貴重な玄珠を広い袖の中に隠しました。しかし、象罔はそそっかしい男で、せっかく見つけた貴重な玄珠をまたいとも簡単に失くしてしまいました。

揚揚くんは母親とおばに、「玄珠を探しに行く象罔」のようにならないよう、大法を大切にしなければならぬと注意を促しました。

揚揚くんによると、母親が学法や煉功を行うとき、異なる次元の佛、道、神も聞いていて、煉功していたそうです。佛は蓮の花の上に座っていて、道は太極図の上、そして神は雲の上にいました。彼らが着ている服の色は、彼らの果位と次元を表していました。ある日、業力を消去している母親が頭痛に襲われたとき、揚揚くんは「ママの頭の上にさらに頭ができていますので、喜ぶべきだよ」と言いました。母親はすぐに師父が仰っていたことを思い出しました。「全身に電気が通ったり、冷たく感じたり、熱く感じたり、しびれたり、重くなったり、回る感じがしたり、あまりにも多くの状態があります。感覚の上では全身に不快感を覚えますが、それは良いことです。それはエネルギーと身体の変化によるものです」

揚揚くんは母親の頭の上にも頭があって、しかもそれぞれの頭のおでこには大きな目があり、中には無数の小さな目があって、体の至るところにも目がありますが、大きな目の中にある目ほど多くないと言いました。

また、揚揚くんはこのようなことも言いました。「ママの体から発せられる金色や銀色の光の束は、最近ますます太く明るくなっていて、特に煉功中はさらに眩しくなっているよ。何百億もの悪魔が必死になってママの邪魔をしに来たけど、ママの体から発せられた光から飛び出した銀色の針のような光によって、それらは全部、煙や血の水になってしまった。それに、守護神も戦いに加わっていて、悪魔を退治したんだよ」

ある日、揚揚くんの学校では大会が開かれ、校長先生は小学生全員に、大法に反対する署名をさせようとしていました。校長先生の話が終わらないうちに、揚揚くんは『轉法輪』の「論語」を心の中で暗唱し始めました。急に、校長先生がしどろもどろになって、「学校に近づかないでください」と言いました。すると、教師も生徒も皆爆笑してしまいました。生徒たちは「行きましょう。学校を離れないと！」と言いました。結局、誰も署名しませんでした。

揚揚くんによると、母親は人間界に来てからすでにかなり長い年月が経っていて、何度も転生したことがあり、お釈迦様の弟子になったこともあれば、女王になったこともあり、科挙の試験にトップで合格したこともあって、羊飼いや乞食になったこともあったそうです。母親自身も、座禅中に自分が西洋人の女王になったこと、そして揚揚くんと同じ時期に西洋人として転生したことを見ました。その一世で、母親と揚揚くんは家族で、母親が「東洋の文化が好きなので、そっちに行きたい」と言ったのです。東洋に転生した母親は、おばと一緒に物乞いをしていました。

私たちが法を得るのはどんなに難しいことだったのでしょうか！　そして歴史の中で、どれほどの苦難と探求を経験してきたのでしょうか！

揚揚くんは、未来の人々の生活はとても素晴らしいものだと言っていました。街が整然と並び、雨にも香りがあるそうです。人々が住む家はとても広く、庭の至るところに花や野菜、果物があります。その時の水は純粹そのものなので、果物や野菜を洗おうとすれば、水に浸すだけできれいになり、使用後の水もまだ依然として澄み切っていて、少しも汚れていません。大法を修煉している人々の家は宮殿のようで、家にある金属製のものはすべて金でつくられています。修煉していない人々の家は銀でつくられています。また、未来の人々が着ている服は、現代人である私たちが着ている服とは違い、むしろ古代の人々の服装に近いそうです。

11. 良い功法は永遠に人々の心に根付く

私の名前は喬喬（キョウキョウ）です。11歳で小学4年生です。修煉を始める前の私は多くの病気があって、咳をし始めたら止まらず、喉が乾燥して痛くなり、夜中に咳で目が覚めることもよくありました。家には咳止めシロップが常備薬として常に十数瓶ほど置いてあって、毎日学校へ行く時も持って行きました。

6月1日、子どもの日の遠足の時、先生は食べ物や飲み物を持って行ってもいいと言いましたが、私は用意するのを忘れました。クラスメイトたちがおいしそうに食べているのを見ながら、私は立ちすくむしかありませんでした。ランドセルに手を入れると、薬の瓶に触れたので、私はそれを取り出して飲みました。同級生に「おいしいの？」と聞かれて、私は「うん」と答えるしかありませんでした。薬は甘かったのですが、心は苦しかったです。

また、私はよく風邪をひいて熱を出していました。ある日、母が買ってきてくれた薬は苦いと思い、飲むのを嫌がりましたが、母は必ず飲まなければいけないと言いました。仕方なく、私は鼻をつまんで、母がスプーンで口に入れてくれる薬を飲みましたが、途中で何度も吐き出しました。

私はよく薬を隠していましたが、いつも母に見つけられて飲まされました。1996年の年末に法輪大法を修煉してから全ての病気が消えて、私はとても健康になり、母に薬を飲まされることもなくなりました。

1997年3月5日、私は天目が開き、最初は白と黒の八卦図が見え、続いてすべての法輪バッジが回転しているのが見えました。3月8日、師父の法身が見えて、しかも2人おられ、会話しているようでした。3月12日、6人のとてもわんぱくな嬰孩が見えました。8月4日に『轉法輪』を読んでいたとき、中の文字が金色の光を放っているのが見えました。

ある夜、私は師父に連れられて、地面も壁も金色で、緑の葉っぱや色とりどりの花がある場所に行った夢を見ました。

金色の池から、青と白のしま模様の水が柱のようにわき上がっていて、陶器でできたような白い鯉もありました。

師父は金色の煉功服を着ておられ、私は普通の服を着ていました。師父は優しく話しかけて下さっているのに、私は何も聞こえず、私はまるでそこにはおらず、外にいるような感覚でした。そして、師父と私を隔てる大きくて透明なカバーが存在しているようでした。

目が覚めた時、「なぜ師父のお話が聞こえなかったのだろうか？」とずっと不思議に思っていました。母に聞いてみると、母は「師父と話しているのはあなたではない

のよ。あなたは外にいますので、見ることも聞くことはできなかったのね。しっかり修めれば、師父は常に加護して下さいのよ」と言ってくれました。

修煉を始める前の私は幼かったにもかかわらず、嫉妬深く、顕示心と闘争心も非常に強かったです。ある時、学校でクラスのリーダーを選ぶことになって、先生の注目を引いて選ばれるように、私は背筋を伸ばして座っていました。でも、私の反対側に座っていて、背筋を伸ばしていなかった女の子がリーダーに選ばれたのです。嫉妬のあまり、私は事あるごとに彼女と対立し、彼女の欠点を見つけて引きずり下ろし、自分が代わりにリーダーになろうとしていました。

今になって考えてみると、自分は修煉者なので、もうそんなことで人と争ってはいけません。学生として、私は知識を学ぶために来ているのであって、地位を争うためではありません。それに、リーダーは皆に奉仕するための仕事で、誰がやってもよく、人より自分のほうが良くできるとも限りません。真心から大法を学んでいる人なら、名利を重んじるはずはありません。いつでもどこでも人のために考えることができ、初めて「真・善・忍」の要求に符合していると言えます。

「真・善・忍」の基準に符合している人々は、みな善良な人です。法輪大法は人々を善に導く良い功法であり、江沢民が好き勝手に禁止していいものではありません。良い功法であれば、間違いなく永遠に人々の心に根付くでしょう。中国の警察のおじさんやおばさん達に一言いいたいと思います。どうか法輪大法の修煉者を殴るのはやめて下さい。彼らはみな良い人です。「善悪には報いがある」と言われるように、おじさんおばさん達のために呼びかけます。

12. 心自ずから明らかな子ども弟子

私はカナダ人です。私の友人である、小さな同修のケビン君はまだ2歳半です。彼が最初に覚えた言葉は何だと思いますか？ それは、李洪志先生が書かれた『洪吟二』の「真性が顕れる」という詩の一行目、「大法を堅く修めて、心動かず」でした。彼の両親はその瞬間、驚きと喜びでしばらくは言葉を失っていました。

ケビン君は私の電話に出る度にまずは挨拶をして、その後は必ず「『洪吟』を暗唱してもいい？」と尋ねてきました。「いいよ」と私が言うと、彼は2つの詩を暗唱してくれました。声が幼く、すらすら言えない時もありましたが、心のこもった朗読のようでした。そして、お別れの挨拶をしてくれました。

彼が『洪吟』を暗唱できたのは、大人から教わったのではなく、大人たちが朗読するのを聞いているうちに、いつの間にか覚えてしまい、しかも自分が暗唱した詩が本のどのページに載っているかを探し出すこともできます。家族が「心自ずから明らか」という詩を朗読するのを3回聞いただけで、彼は暗唱できるようになり、『論語』の最初の2段落もこの方法で覚えました。

ケビン君は頭が良く、わんぱくな子で、時々いたずらもしますが、大人が学法を始めるとすぐに静かになります。この間、我が家で彼の母親が座禅していて、彼が熱心に遊んでいるのを見て、私は『轉法輪』を手に取り、小声で読み始めました。それが聞こえたたん、ケビン君は持っていたオモチャを置いて私の隣に駆け寄り、「もっと大きい声で」と私に言いました。「ママが煉功しているから、大きい声はダメだよ」と私が言うと、彼は素直にうなずき、オモチャ遊びを後にして、私と一緒に学法し始めました。

ケビン君は幼いものの、物事がよく分かっていて、法輪大法の良さを知り、自ら学法や煉功をしたがるだけでなく、それをより多くの人と共有するのも忘れていません。ここ数日、まだあまり話せないケビン君が、また奇跡を起こしました。

彼の母親と姉が自宅近くの芝生で煉功していたとき、法輪大法を紹介する英語の新聞の束を道路の脇に置いていました。

煉功を始める前に、母親は「今日はケビンちゃんが新聞を配るのよ」と何気なく言いました。ケビン君はそれを聞いて、本当に新聞を手にして立ち上がり、人が来るのが見えたら、すぐに向かって行き、小さな手で新聞を手渡しました。母親と姉が2時間の煉功をしていた間、彼も2時間ほど道端に立っていて、煉功が終わった時、新聞は全部配り終わっていたのです。

翌日、母親に言われなくても、ケビン君は自ら新聞を配りました。2人の西洋人の女性は感動して、新聞を受け取るとすぐに財布からお金を取り出し、「食べ物でも買ってね」とケビン君に渡そうとしました。でも、ケビン君はそれを受け取ろうとしま

せんでした。その後、この2人の女性はケビン君の母親と姉から、第2式の功法（法輪椿法）を習いました。彼女たちはこの大法の音楽が好きだと言い、ケビン君の姉は煉功音楽のCDを2つあげると約束しました。2人はとても喜んで、「毎日煉功を見に来ます」と言いました。

しばらくすると、別の黒人女性が3人の子どもを連れてやってきました。ケビン君はさっそく彼女に駆け寄り、新聞を渡しました。家族4人は大喜びし、その場で法輪大法の第3式と第4式の功法を習い始めました。煉功が終わった後、女性は「とても気持ちがいいですね」と言いました。

後で、母親がケビン君に「新聞を配っていた時、どうやって渡したの？」と聞いたら、ケビン君は「法輪大法です、と言って渡したんだよ」と答えました。

13. 奇妙な世界

私は童心（どうしん）と言います。今年9歳で、法輪大法を6年間修煉してきました。中国共産党が法輪大法と大法弟子を残酷に迫害し、人々が嘘に騙されていくのを見て、私は長い間、心で思っていたことを全部話し、大法が真の科学であることを人々に知ってもらおうと決心しました。

ある日、おもちゃ屋さんでバイクのおもちゃを見つけました。透視機能を使って、私は車内にガラス玉があるのが見えました。そのガラス玉が私を知っているかのような不思議な感覚を覚えたため、私は父に買ってもらいました。家に帰ってから、私はおもちゃを分解して、中のボールを取り出しました。

ガラス玉は直径5センチほどの大きさです。最初は中をのぞいてみても、ぼやけていて何も見えませんでした。しかし、そのボールは次第に明るくなって光を放つようになり、しまいには不思議な世界を見せてくれました。中にはたくさんの人が住んでいて、列車や汽車、飛行機などの交通手段もあれば、整然と並ぶ高層ビルもあって、人々もお互いに友好的です。ある人が他人の足を誤って踏んでしまった場合、すぐに「ごめんなさい」と言い、相手もすぐに「大丈夫です」と答えていて、地球のようなケンカや殴り合いは全くありません。お店にはトランスフォーマーなどのおもちゃもありません。

人々は空中に浮くことができ、大きくも小さくもなることができます。子どもは親よりも大きくなることができます。女性は長い髪に長いドレスを着ていて、男性は短い髪に長いズボンを履き、自分の好きなように変身することもできます。人々はみな美しく、夜がないため寝る必要もありません。中には国王がいて、雨を降らせたり、晴れにしたりして、天候の変化の命令を出していました。

桃を食べたいときは、桃の種を土の上に置くと、それが勝手に土の中にもぐり込んでいきます。ガラス玉の中にいる人が「成長する」と言うと、1分も経たないうちに、桃の実がたくさんついた大きな木が、目の前に現れてきます。大きな桃をかじりながら、中の人「甘い、おいしい」と言っていました。

ガラス玉の中の人々は自由に欲しいものを出ことができ、お金もいりません。また、誰もが利己的ではなく、常に他人のことを考えています。草木が生い茂っていて、いろんな種類の動物や鳥もいて、キツネやヘビなどの憑き物のようなものはいません。

そこには、法輪大法を紹介するコーナーがあって、多くの人が集まって見ているので、私も見ました。「法輪大法は真の宇宙大法である」というタイトルが見えました。

その世界でも、多くの人は飛行機に乗って空を飛んでいます。私が手を伸ばすと、飛行機が壊れてしまい、機体が落ちてきて、乗客たちもゆっくりと地面に降り立ちました。私が手で機体を動かすと、飛行機は修復され、乗客たちがまた乗り込んで、飛行機は再び飛び立ちました。私がまた機体を壊してみると、それが再び落下してきました。乗客たちは誰も怒らず、「あなたは本当にいたずらっ子ですね」と言うだけでした。

一度、私は走行中の列車の最後の車両を、こっちの世界に引っ張り出してきました。乗っていた人たちは「なぜ私たちを引っ張り出したのですか？」と優しく私に聞きました。そこで、私は彼らを戻してあげました。その時、運転士は私に「あなたに時間を取られてしまったため、この列車の通行を禁じる赤信号を全部壊して、列車をずっと走らせていくしかありません」と言いました。

その時、反対側から列車がやってきているのを見て、列車同士がぶつかるのではないかと思い、慌てて線路を水の中に引っ張りました。列車は一気に船に変わりました。その時、船に乗っていた人たちも、「この子は本当にわんぱくですね」と言っていました。

また、私はいたずらで建物を道路に押し倒したこともあります。建物の中の人々が「建物を早く立たせて」と言うので、私は立たせてあげました。その後、私はまた建物を持ち上げて、中の人々が「置いてください」と言うので、私はまた地面に置いてあげました。中の人たちは心が優しくて、全く怒ったりしなかったりしませんでした。

人々がビルを建てているのを見て、私は彼らが基礎作りのために掘り出したばかりの土を戻しました。中の人々が「早く土を取り出してください」と言い、私は指でほじるだけで土が全部出てきました。彼らの建物が整然と建てられていないのを見て、私はそれを押し倒しました。彼らは私に理由を尋ねてきて、理解した後、彼らは喜んで建て直しました。また、彼らができないことをしてあげた後、「いいことをしましたね」と言ってくれて、私はすごく嬉しかったです。

子どもの遊び場では、たくさんのお子どもたちが遊んでいました。私が手を伸ばすと、彼らは私の手の平に乗りました。私は彼らをその世界から連れ出して、また送り返してあげました。

私たち地球人が徳を重んじないのはとても悪いことだと思います。特に、中国共産党の江沢民のグループは法輪功に反対していて、人々に苦痛をもたらしています。ガラス玉の中の人々は法輪功を支持していて、みんなが幸せです。また、私はテレビを観るのも好きではありません。あまり面白くないからです。私のような子どもたちが、一日も早く法輪大法に出会い、修煉するようになることを願っています。実際、多くのことはとても不思議に聞こえますが、しっかり修煉すれば、多くの不思議なことが現実のこととして、あなたの目の前に現れてくるのです。

14. 詩「遊」

修煉者は世界各地に広がり
自由気ままな神は 宇宙中を旅する
立派な松のように 雪の中に立ち
一緒に祝い 共に春を讃えよう

注：作者は中国の13歳の大法子ども弟子です。
これは、彼が中国共産党による迫害に追われ、
路頭に迷っていた中で書き下ろした詩です。

15. 師父が天目を開かせて下さった

私は8歳の時のある日、近所のおばさんに誘われて、李洪志先生の説法ビデオと一緒に見ました。見ているうちに、ふと気づくと、師父が着ていたスーツが、急に黄色い袈裟に変わったのが見えました。

不思議に思った私は、「おばさん、師父は服を着替えているよ。さっきはブルーだったけど、今は金色に変わっているよ！」と言いました。おばさんは「そうなの？」と言い、『轉法輪』を私に見せて、表紙にある法輪の図形を見て、と言いました。見てみると、法輪の図形が非常に速いスピードで回転しているのが見えました。おばさんは嬉しそうに「師父はあなたの天目を開かせて下さったのね」と言いました。

その後、師父の説法を見ている最中に、師父の同じ姿かたちをした佛がたくさんいて、師父を囲んで何層もの輪になっているのが見えました。あとで他の修煉者から、それは師父の法身だと聞き、「法身なんだ！ なるほど」と思いました。

(1) 不思議な世界

その後、おばさんはよく私を煉功場に連れて行ってくれました。行く途中、道を歩きながら空を見上げると、そこには師父の法身がいっぱいあって、大きいものもあれば小さいものもありました。1万人もいる煉功場の上空が赤く染まり、大法弟子たちが集団で煉功していた時、非常に強いエネルギーを帯びた、大きな丸い柱の形のカバーが皆を包みこみ、カバーの上部が大きな法輪となっていて、師父が法輪の上に座って大法弟子たちの煉功を見ていたのが見えました。

また、私はこういう光景も見えました。それぞれの大法弟子の頭上の右側には、大きな蓮の花の中に座り袈裟を着ている師父の法身がいて、その背後には、金のふち取りをした透明体の師父の法身が立っていました。

普段『轉法輪』を読む時、本にある全ての文字が師父の法身と法輪の形で、本の各ページにはピンクの蓮花座に座っている師父の大きな法身が常に見えます。その蓮の花はつやつやして色合いも柔らかくて、まるで咲いたばかりのような美しさです。それぞれの文字がどんなに小さくても、そこには法身の顔がはっきりと見えて、とても不思議でした。

ある日、法を学んでいた時、本の中の法輪がぐるぐると回っているのが見えました。「法輪の中はどんな風になっているのだろう？」と思ったとたん、突然、私は自分が果てしなく広い世界にいるのを感じました。

その世界では、中心でも隅でも、短い間隔ごとに法輪があります。気ままにそのうちの一つの法輪に入ってみると、私はより広い法輪世界に入ったと感じ、更にその中にある法輪に入っていくと、私は更に更に広大な法輪世界に入ったのを感じました。この行為をいくら繰り返しても、最後までたどり着くことができませんでした。

師父の法身に入ってみた時も法輪と同じ状況で、どこまで行っても師父の法身がありました。

（２）他の空間では、私たちは常に一緒に煉功している

以前、一人で煉功していた時、私はいつも「一人ではエネルギー場が弱く、孤独だ」と思っていました。今ではそんなことは考えなくなりました。なぜなら、ある日の煉功中に、私は同じ次元にいる同修たちがこの空間では私と一緒に煉功していませんが、他の空間では私と一緒に煉功していることに気づいたからです。

第一式の「佛展千手法」を煉功していた時、私は清々しい世界にいました。その全ては人間の言葉では表現できないほど美しく、心が晴れ晴れとした楽しい感覚になりました。そこではすべてが透き通っていて、空気さえも爽やかで冷たく、それを吸い込むと頭が冴えて、体がその世界と一体化したように感じました。その空間では、10人ほどの同修が私と一緒に煉功していました。

おととい、第二式の「法輪椿（とう）法」を煉功していたとき、私は自分が夜空のような黒い背景の下で煉功しているのが見えました。頭前抱輪をしていたとき、両手に抱えられている法輪は正面がこっちに向く方向、横方向、そして平面方向に回転していて、十方世界に向けて回転していました。次の日にこの功法をしていた時、私は自分が赤とオレンジ色が混ざった炎のような空間の中で煉功しているのが見えました。人間界にある火のようなものではありません。私は下半身から上半身に向かって熱気が上がってくるのを感じ、体がポカポカでした。

第三式の「貫通両極法」を煉功していたとき、私の周りには宇宙の一番上に直接達する大きな銀白色の柱がたくさんあることに気づきました。

第四式の「法輪周天法」は、私は無数の蓮の花びらがある世界の中で煉功していました。蓮の花びらの配置はとても不思議で、バラバラのように見えますが、実際はとても整然と並んでいて、とても美しかったです。花びらはピンクと白で色鮮やかで、内側からとても繊細な明るさを放っていて、私がこれまで学んだ形容詞では表現できないほどの美しさでした。

蓮の花びらの世界では、私は蓮の花の爽やかな香りを吸い込み、人間界では想像できないほどの美しさを感じました。自分の目で見ていなければ、それが幻覚としか思えず、自分がその世界の一部になったような気もしました。

私は第五式の功法である「神通加持法」をあまり煉功しないため、たとえ他の同修と一緒に座禅していても、他の空間で見れば次元の差が大きく開いています。異なる他の空間での同修たちの真の姿が見えた時、私は思わず感心し、威厳を感じ、直視する勇気を失ってしまう時もありました。

つまり、法輪大法の修煉における向上は、ものすごく速いのです。今日はこの空間で煉功していても、明日はもっと高い境地にいるかもしれません。それだけでなく、煉功の最中に突然ある理が分かったら、瞬時により高い境地に上がっていくこともあり得ます。

（３）天上のすべての衆生が私たちが羨んでいる

ある日、私は自分の修煉のエピソードを書いている最中に、突然、自分が天国世界に来ていて、ある大きな佛のそばにいたような気がしました。

急に目の前に大覚者が現れたので、私は緊張のあまり、慌てて後ろに下がって距離を取りました。よく見てみると、私は大覚者の右下方向にいました。

霧がかかっていましたが、大覚者の体ははっきりと見えていました。大覚者は金色の蓮花座に座っていて、蓮花座は内側から非常に繊細な光を放っていました。霧が濃くて、私は3層の蓮花しか見えませんでした。また、大覚者の真後ろには、椅子の背もたれのような美しいものが蓮花座とつながっていて、その中央には、私には読めない銀白色の文字が縦に書かれていました。

背もたれの中央には、大きな楕円形の金色のエネルギーの塊があって、そのエネルギーの塊は密度が非常に、非常に、非常に高くて、四方八方、そしてはるか遠いところへ帯状の光を放っていました。

大覚者がはっきり見えるように、私はおどおどしながら正面に回ると、「あ！ 師父だ！」と分かりました。師父は慈しみ深い顔で目を伏せて座っておられ、髪は青くて艶があり、くるくると巻いて、かなり高いところまで重なっていました。

驚きと喜びとともに、ここにいるのが師父だと知り、少し安心しました。周りをよく見回してみると、私はまたも驚いてぽかんとしました！ 周りの霧の中には、見え隠れする数多くの天上の衆生がいました。彼らはみな目を閉じて座っており、片手を立て、口では何かを唱えていました（邪悪を取り除くための発正念をしているのかもしれませんが）。

すぐ目の前にいるように見えた師父と、師父と対面して座っている衆生たちを見て、私はあることが分かりました。「私のいる師父が見える空間と、反対側にいる衆生たちと師父がいる空間の間には、数え切れないほどの層の空間が隔てています。師父がいる空間の『密度』（適切な言葉がない）があまりにも高くて、私の命はそれに耐えられるはずがなく、本当にこのままその空間に入ると、命が解体してしまうでしょう。私が師父の姿を見ることができるよう、慈悲深い師父はわざわざ私に覆いをかけられ、真正面に来れるようにして下さったのです」

彼らに向かって近寄ろうとしたとき、ある強烈なエネルギーが押し寄せてきて、私は頭がぼんやりとさせられました。その時、彼らが私にこう言っているのを感じ取り

ました。「あなたたち人間界の大法弟子は本当に羨ましい存在です。それほどの得難い機会でも手に入れることができるなんて。しかし、私たちは、それらの精進していない修煉者のことを、本当に残念に思っています」

16. 真に大法を修煉すれば、必ず家に帰れる

私は10歳の大法子ども弟子で、3歳の時に、おばあちゃんに『轉法輪』と『洪吟』を教えてもらって一緒に読みました。1年かけて、私は『轉法輪』を読み終え、4歳の頃から自分で2回目の学習を始めました。

ずっと読み続けてきて、今日、私は65回目の『轉法輪』の学習を終えました。ここでは、私が法を学ぶ過程で経験した不思議な出来事を、他の子ども弟子と交流したいと思います。

(1) 「法輪大法は素晴らしい」

1年生から3年生まで、学校では多くの不思議な出来事がありました。ある日、私はクラスメートに足を引っ掛けられて倒れてしまいましたが、彼を責めることなく、「大丈夫だよ。続けて遊ぼう」と笑顔で言いました。また別の日に、他のクラスメートが私の顔をつねった時、力が強かったので彼の爪が私の顔をひっかいてしまい、私の顔から少し血が出ました。このクラスメートはとても怖がっていました。私はすぐに「大丈夫だよ。すぐ良くなるから」と彼に言い、心の中で「法輪大法は素晴らしい。真善忍は素晴らしい。法輪が自動的に修復してくれる」と唱えました。

ある日、遊んでいる最中に、あるものが突然飛んできて、私の額に当たりました。触ってみると血が出ていました。後で分かったのですが、あるクラスメートが羽根けり遊びをしていて、羽根の鉄のかけらが私の額に飛んできたのでした。その時、私は手で額を押さえ、心の中で「法輪大法は素晴らしい。真善忍は素晴らしい」と黙々と唱え、しばらくして手を離してみると、額の傷はほとんど治っていました。

(2) 師父から授かった神通力を持つ宝物

私は小学1年生の頃から、筆を使って書道や字を書く練習をしていたので、筆は私にとって親友のようなものです。ある日、身長が2メートルを超え、目が6つ、耳が4つある大きな悪魔が夢に現れて、とても凶暴な様子で私に向かってきました。私が手にしていた筆を振ると、空から金色（こんじき）の光が降りてきて、その悪魔を真っ二つにしました。その直後に、それが溶けて消えてしまいました。実は、その筆は魔法の筆で、師父から授かった、悪魔を鎮める神通力をもつ宝物であることに気がつきました。

(3) 法を学び続ける

『精進要旨』の「法の中に溶け込む」の中で、師父は次のようにおっしゃっています。「人間はまるで一つの容器のようなもので、何かを入れればそれになります」。「ですから、法を学ぶことについて、はっきりとした認識を持たなければならないのです。本を多く読み、本を多く学ぶことは真に向上するための鍵なのです」

今年、65回目の『轉法輪』の通読を終えたある日、一つの夢を見ました。私は大きなステージの上に立っていて、周りには2人の黒人と、賞を授与している人が1人いました。ステージの下には、黒人、白人、黄色人種など、たくさんの人がいました。その時、賞を授与する人が私のところに来て、四角いノートを手渡してくれました。ステージの周辺から拍手が沸き起こりました。目が覚めた後、私はとても嬉しくて、「師父、励まして下さって、ありがとうございます！」と思いました。このことをおばあちゃんに話すと、おばちゃんは「法をよく学ぶだけでなく、煉功もしっかりできるように頑張ろうね」と言いました。

その日から、私はおばあちゃんと一緒に煉功を始めました。私が煉功を続けていなかったにもかかわらず、師父は私を励まして下さいました。

ある日、私がうとうとしていた時、空から大きな星が降ってきて、私の目の前に来ました。私はその星を掴み、空に向かって飛んでいきました。その時、目の前にいくつかのハシゴが現れて、そのうちの一つが天の頂きにつながっていました。私がそのハシゴを登り、大きな天の馬に乗った時、その天馬（てんま）は翼を広げて空を駆け抜け、ある大きな崖の上で止まりました。

天馬は「この先は崖なので、これ以上運べません。ご自身で渡っていかなければなりません」と言いました。そこで、両腕を伸ばすポーズをした途端、私は一瞬にして反対側に着き、たくさんの宮殿と様々な佛が見えました。彼らは金色（こんじき）の衣装を身にまとい、牛や羊、魚など、様々な動物に乗っていました。その時、師父の法身が現れて、「あなたの宮殿はあそこですよ」と教えて下さいました。笑いながら夢から目を覚ました私は、自分の本当の家に行ってきたのが分かりました。

不思議な出来事はまだまだたくさんありますが、とりあえずここまでにします。全ての大法の子ども弟子に伝えたいのは、私たちが法を多く学び、よく学び、師父のお言葉に従えば、必ず神聖でこの上なく美しく素晴らしい私たちの元の家に戻ることができるということです。